

海音寺潮五郎

江戸開城

新潮文庫

352094

え 江 戸 開 城 じよう

新潮文庫

か - 6 - 9



昭和六十二年十一月十五日印
昭和六十二年十一月二十五日発行

著 者

海音寺潮五郎 かいおんじちやうごろう

発行者

佐藤亮一

発行所

株式会社 新潮社

郵便番号 一六二

東京都新宿区矢来町七一

電話 業務部(〇三)二六六―五一
編集部(〇三)二六六―五四四〇

振替東京四一八〇八番

定価はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・錦明印刷株式会社 製本・錦明印刷株式会社

© (財)海音寺潮五郎記念館 1976 Printed in Japan

ISBN4-10-115709-X C0193

新潮文庫

江戸開城

海音寺潮五郎著



新潮社 販

3957

目 次

革命の血の祭壇……………	九
札つきの和平主義者勝安房……………	二九
官軍先鋒三島に達す……………	四七
山岡鉄太郎登場……………	六五
パークスの横槍……………	八六
西郷・勝の会見……………	一〇八
西郷と勝に対する諸藩兵の不平……………	一三三
勝とパークス……………	一五二

開城はあつたが……………	一七一
徳川家の処遇問題……………	一九二
勝の慶喜よび返し運動……………	二二三
さまざまな反薩的批判……………	二二三
彰　義　隊……………	二五三
彰義隊討伐その前夜……………	二七四
彰義隊潰滅……………	二九三

江戸開城

革命の血の祭壇

一

慶応四年二月二日付で、西郷吉之助が大久保一蔵に書いた手紙がある。

唯^{ただいま}今別紙がとどきました。慶喜^{よしのお}退隱の嘆願、甚^{はなは}だもって不届千万です。ぜひ切腹にまで参^{かん}らなければ相済まないことです。必ず越前^{えちぜん}や土佐などからも寛宥論^{かんゆうろん}が起りました。静^{せい}寛院宮^{かんいんのみや}のような方まで、賊にお味方なされて、退隱くらいですむと思っておられるようでは、世間は一層ことの重大さを知らないと思わなければなりません。どうしても断乎^{だんこ}追討とあらせられたきことと存じます。かくまで押しつめたものを、寛に流れては後に悔いてもかいたきことになりました。例の長評議^{なが}に因循を積み重ねては、千載の遺恨と思えますから、なにとぞ、お持前のご英断をもってお責めつけ下されたく、三拝九拝、願^{たてまつ}い奉ります。以上。

書中にいう別紙とは、徳川慶喜の手紙と十四代將軍徳川家茂いえもちの未亡人靜寛院宮の嘆願書との写しである。慶喜は正月二十一日付で、自分に好意を持っていると思われる在京の越前えちぜん春嶽・尾張慶勝・山内容堂・浅野長勲・細川護久等もりひさらに書き寄せて、自分は退隱するから、朝敵の名を免ぜられるように朝廷にとりなしていただきたいと依頼したが、その手紙は正月末日に京都についた。靜寛院宮は慶喜に泣きすがられ、慶喜は退隱して、しかるべき者をえらんで相続させることにしますから、寛大なるご処置あつて、徳川家は存続せしめられるように、また箱根以東へ官軍をお向け下さらないようにとの嘆願書を持たせて、お局つぼねを上京させられ、そのお局がやはり月末あたりに京都に着いたのであつた。

西郷のこの手紙において、我々の先ず感ずるのは、西郷が慶喜にたいして実にきびしい処置を主張していることである。

大体、西郷の本質は冷厳峻刻しゅんこくにはなく、温情抱擁にある。むごいことは大きらいな性質なのである。かつて第一次長州征伐の時、そのはじめにおいては、西郷は、長州藩は禁裡きんりにたいして発砲し、鉄砲弾が紫宸殿しんてんのお庭先に落下するといふほどの不屈きを働いたのだから、領地を削つて十萬石くらいにしてどこか東国に国がえするくらいにしなければ大義名分が立たないと公言していたが、征長総督の尾張慶勝を助けて参謀長的役割で實際に局きよくを結ぶにあつては、直接の出兵責任者である三家老を切腹させればそれでよいとして、一兵も加えずしてすました。もちろん、削封さくほうや国がえなどはしなかつた。

声を大にすることによつて敵をおそれさせ味方を奮い立たせ、局を結ぶにあたつてはうん

と寛大仁慈の処置をして懐かせるというのは、西郷の戦さを処置する場合の手口といってよいのであるが、この場合には別にまた理由があった。

明治維新は王政復古という名で行われたが、実は復古ではなかった。公家に政治能力のないことは明らかである。大化改新から平安朝初期までの王政時代にかえせないことは言うまでもない。だから、名は王政復古でも、実は天皇の下に公家・大名・諸藩臣の優秀分子で合議政治を行おうというのであった。

日本人は長い間日本の本来の政治形態は天皇親政であつたと考えて来たが、実はそうではなかったのではないかというのが、最近の一部の歴史学者達の考え方である。魏志倭人伝に出て来る耶馬台国では女王ヒミコが最も尊貴な君主となっているが、これはいわば宗教的最高の存在で、政治はヒミコの弟の男王が行なっていたことになっている。日本書紀や古事記に記述されているヤマト朝廷時代のことを虚心に読むなら、天皇はやはり宗教的最高の、いわば象徴的存在で、政治は豪族らがとり行なっていたと解釈しないわけに行かない。つまり、日本では主権は二本立てになっていたのである。

この政治形態にたいして、日本人が批判的になつたのは、聖徳太子の頃からであり、聖徳太子がその批判的日本人の代表者である。

中国は秦の始皇帝の時、天下の主は政治的にも精神的（宗教的といつてもよい）にも至高のものであるべきであり、万国万姓を統ぶべきものであり、これを皇帝ということになった。秦は二代にしてほろんだが、この考えはずっと伝承された。それでも、三国から六

朝ちようの頃には、皇帝という名称はあっても、実は天下の主ではなく、ある部分の主たるにすぎなかったが、隋ずいの文帝に至って天下が統一され、久しぶりに皇帝の名に恥じない皇帝が出現した。

中国文化にたいして強烈なあこがれを持ち、熱心にこれを学んでいる聖徳太子にとって、中国式皇帝のあり方と日本の天皇のあり方とをくらべて考える時、あれこそ本ものであり、これは野蛮未開な存在であると考えざるを得なかったに違いない。この場合、中国が強力な統一国家となったことにたいして、日本が従来そのままでは侵略の脅威を感じ、不安であつたという考え方もあり得ようが、私はそこまでは考えない。

ともあれ、聖徳太子は日本の天皇を中国の皇帝のような存在にしようと、大いに努力しはじめた。当時は蘇我そが氏の全盛時代であるから、太子も現実の政治面では天皇家の権力をのばすわけには行かないので、もっぱら教育面から日本人の天皇観をかえて行くことに骨折った。十七条憲法をこの目で見るなら、よくわかるはずである。太子のこの教育がどの程度に効果があつたかわからないが、太子の死から二十年と少したって、中大兄皇子・藤原鎌足なかのおお兄のおうじ かじわらのかまたりらによってクーデターが行われ、豪族代表である蘇我氏がほろぼされ、大化改新が行われ、ここに天皇は中国の皇帝と同じものとなった。注意すべきは、中大兄や鎌足のブレーンになったのは皆大陸からの留学帰りの、大陸文化の影響を強く受けた人々であつたことである。この人々にとっては、主権者なるものは中国の皇帝的なものであるべきで、日本固有の天皇のあり方などは未開野蛮なものと思われなかつたのではないだろうか。

大化の改新によって、日本は天皇親政となったのだが、これは長くはつづかなかつた。平安朝初期の清和天皇頃になると、摂関政治がはじまって、天皇は至尊であるだけで政治にはタッチされない存在となった。

摂関政治につづいては、幕府政治がおこつて、途中、建武中興けんむのちゆうこうという天皇親政時代がありはしたが、これはごくごく短い期間で、考えに入れるほどのことはない。

日本の国がはじまってからいくらになるかよくわからないが、仮に那珂通世なかもつよ博士の日本紀元には六百六十年ほどのびがあるという説を採用すれば、大体西洋紀元と同じになるから、千九百余年たっていることになる。このうち天皇親政の期間は二百八十年くらいしかない。つまり七分の一しか親政期間はなかつたのである。明治維新の頃の人は日本紀元を信じていたから、もっと率が悪くなる。

であるとすれば、天皇親政が日本固有の姿であつたと考えるより、天皇は宗教的な最高の象徴的存在で、政治にはタッチされず、政治の主宰者は別にいるのが、日本の固有の姿であつた。だからこそ、摂関政治がはじまるのにも、幕府政治がはじまるのにも、ほとんど抵抗らしい抵抗がなくしておちつき、長くつづきもしたのだと考える方が納得出来るのである。

しかし、こういう考え方が出来るようになったのは、今日の自由の時代であればこそで、この戦争前などは絶対に出来るものではなかつた。仮に考えたとしても、世に発表など出来ることではなかつた。官憲もうるさかつたが、世間もうるさかつた。右翼とか国粹家とかい

うほどの人でなくても、世間は自分の昔聞いた学説と違う学説を受入れたがらないものである。

それはさておき、幕末・維新頃の人々は、昔からの識者の言ったことを真向正直に聞いて、天皇親政は日本古代の固有の政治形態だったと信じこんでいたから、幕府政治を廃して、政権を朝廷が持つようになったことを、王政復古と信じたのであるが、実は復古ではなく新しい政治形態をはじめることだったのである。つまり、革命だったのである。

ところが、革命にはある程度の血の祭典が必要なのである。血の祭典という犠牲のない革命ほど困難なものはないからである。現に慶喜の大政奉還という平和事実をもって、いわゆる王政復古はスタートしたのであるが、当時の朝廷——天皇政府は表面はともかくも、実質的にはまるで権威のないものであった。天皇政府の実際を中心であった西郷・大久保・岩倉は、新政府は日本を代表する唯一の政権であることを国際的に認めさせようとして、そのような宣言書をつくって、朝議にかけたところ、山内容堂・松平春嶽の二人は、これは現在まで外交一切を取りしきって来た徳川慶喜にたいして工合が悪いといって、反対した。政権を返上した以上、外交権の返上も付随すべきで、工合が悪いなどという理由で反対するのは、天皇政府をどうせ長続きするものかと信用していなかったのである。

このすきに乗じて、慶喜の方は大坂城に英・仏をはじめとする外国公使らを集めて、政治の大権は朝廷にかえしたが、外交権は昔のまま自分にあるから、諸君はそのつもりでいてもらいたい、今の天皇政府は一部の大名と一部の公卿によって、まるで自分の予想しなかった

勝手気ままなことを行なっていると言ひ、やがて自分はこれをくつがえすであろうという意味のことを言外にはめかした。

このように、血の犠牲の上に成り立たない新政府は、この程度のこともきかせる力がないのである。次ぎ次ぎに革新的な施策を実行など出来るはずはないのである。

このまるで弱体で、どうせ長続きはしないものと、人々に思われていた天皇政府に力がつき、權威が出て来たのは、伏見・鳥羽の戦争の途中からであつた。この戦争は本質は徳川方の先鋒隊と薩・長軍との衝突であつた。薩・長方は全力をふりしほっているのに、徳川方は先鋒隊だけの力で戦っているのだから、たとえ負けても、徳川方が腰をおちつけて大坂城にこもつて戦いをつづけければ、決して負けにはなりはしなかつたのである。薩・長方はせいぜい三千五百しかないのに、徳川方は伏見・鳥羽で敗れても少くとも一万の**あちて**の**新**手の兵が大坂にはのこつており、大坂湾には諸藩の海軍に懸絶する優勢な徳川海軍艦隊が**ゆうよく**遊弋していたのだから、どうそろばんをおいても徳川方の負けるといふ計算は立たないはずだつた。

ところが、その戦争に、薩・長軍が勝ち（つまりは前哨戦における勝ちにすぎないのだが）、仁和寺宮が征討將軍宮として錦の御旗をひるがえして陣頭に出られると、形勢がかわつて来た。譜代藩で、現に当主稲葉正邦が老中として江戸で勤務している淀藩が薩・長方に寝返りを打った。伊勢の津の藤堂家は外様藩ではあるが、藩祖高虎以来、徳川家に忠誠を運ぶこと深く、もし西国に事あつて徳川家が出陣する場合には譜代第一の大藩である彦根藩とならんで左右の先鋒をつとめることになっている家であつた。この時京都盆地の咽喉部である山崎